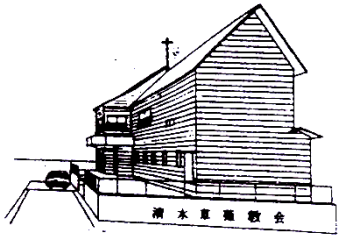
≪今朝の聖書から≫初めの節に“エルサレムで宮きよめの祭りがあった冬”と書き出していることから、またこの聖書が、随所で、旧約聖書をふんだんに使って説明していることからも、間違いなく、著者ヨハネは、ユダヤ人だったようです。このヨハネが次の節では“ユダヤ人たちがイエスを問いただした”と言っているのは、私達にも考えさせる内容を含んでいることが分かります。自分自身の属するところから生まれた人に対して、自分達が問いただしているという構図です。新約聖書全体がこのようになっています。これ以降３０節にある“私と父とは一つである”というところまでが、ひとつの、ヨハネが聞いて彼自身そのように証をする、イエス様の言葉になっています。ヨハネが導かれ、神の国を体験してからの働きは、ここに説明されているのです。パウロも、宣教をユダヤ教を信じていた人達の中から始めました（使徒行伝）。ヨハネは、イエス様がどのような方であるかを説明するために全力を尽くします。キリストについて説明したいのです。多くのクリスチャンも、救われる以前に、沢山の、ある時には、的外れの質問をしたと思います。しかしこのことをも紹介しながら、救い主がどんな方であるかを説明したくてたまらないのです。“しるしを信じない”ということ（２５節）、“信じる者、信じない者とのイエス様の関係（２７節）”、“永遠の命と滅び（２８節）”、“神がイエス様を通してすべてを与えられた（２９節）”、そして“神とイエス様は一つ”と続けられます。このような熱心なヨハネの説明も、全くだらだらした、無価値なものに受け止められることがあることに、気をつけましょう。そのわかれめが“私は話したのだが、あなたがたは…（２５節）”というみ言葉で示されます。ヨハネの福音書が記録されるまでの教会の伝統にも目を向けましょう。大変な数十年だったことが想像できます。伝統というのは、ならわしとか習慣のことではありません。どんな試みがなされ、ある試みは間違いだということが記録に残され、あることろみはその後の教会の成長の中心に据えられて、現代に至っているのはないでしょうか。ここに伝統を学ぶ意味があります。小さな教会に至るまでそうなのです。どんな挑戦が、かつてなされたかを学ぶことは、イエス様と私たちの関係を知るのに、とても大切なことなのです。

週　報

２００８年　９月　７日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師　村上定幸

教会学校	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　E-Mail grace@big.jp